漁業 Fishing Industry

一本釣りからマグロ延縄漁まで。資源を守り、海を育てながら。

通浜の漁港は全国的にも珍しい港。南北にただ長いだけの所に、よく作ったと思われる人工的な港だから。そのルーツをたどれば、明治の頃に細島の漁民が通浜に移住してきたことに端を発し、五十年ほど前から港の建設が始まったことによる。いまだに港は大型漁船がけい留できるよう拡張工事を続けている。

それだけ、活気あふれる港であるという証拠だ。県内でも有数の水揚高を誇る。平成十三年度は約二十一億円。そのうち十七億円ほどがマグロ延縄漁船による漁獲高で、実に八割近い。だいたい五～二十トン未満の船が、一月から六月にかけては日向灘から種子島、沖縄近海へ、夏過ぎからは千葉の銚子沖付近で操業する。このためマグロの水揚げはほとんどが県外か日南あたりが多い。平成十四年に初めて通浜漁港にわずかではあるが水揚げした。港の改良で、大型漁船も少しは入れるようになったこともあるが、

何よりマグロの川南ブランドをつくろう、という表れである。川南町漁業協同組合の登録漁船は二百七隻、このうち四十八隻がマグロ漁、二十六隻がシイラ漁に出る。シイラは県下一の水揚げ量を誇る。

沿岸漁業の場合、一本釣りをはじめ、延縄、曳縄、底曳網が中心。「これには乱獲を防ぎ、資源を守り、一網打尽にはしない、という漁民の思い」（川南町漁業協同組合）が込められている。

港に揚がる魚は約百種類と、極めて豊富。タイ、フグ、ウニ、アワビ、イセエビ、カキ、ヒラメなど高級魚からカツオ、アジ、カレイ、サワラ、ハマチなど庶民的なものもたくさん獲れる。

しかし、獲り続けるだけでは先細りは否めない。漁場も荒れてくるし、海洋資源の枯渇を招くなど様々な問題が表面化する。このため対応策の一つとして、早くから数百にも及ぶ大小様々な魚礁を海に設置してきた。魚礁を入れることにより流れが変わってプランクトンが舞う。陰ができて魚のすみかにもなりやすい。近海魚はほとんど回遊魚だけに、魚礁はチカラを発揮する。

また、稚魚を一定の大きさにまで養殖して放流する事業も盛ん。カレイ、カサゴ、トラフグ、大ニベ、マダイ、アワビなどなど。大きく育って戻ってこいよ、といいたいところだろう。

山に広葉樹を植樹する“漁民の森”も、海を育てる取り組みのひとつ。多くの漁業関係者が活動に参加する。

とにかく、通浜の漁港はゲンキだ。様々な分野で後継者難が叫ばれる中、約四百人が加入する川南漁協にはその心配はないという。

親子三代に渡って漁業を営むところも珍しくない。「小さい頃から海に向かう親の背中を見て育ってますから」（川南町漁業協同組合員）と誇りを持って生きる漁民の姿が浮かび上がってくる。